

# 種子島二型アクセントの境界特徴－自発談話音声資料の分析<sup>1</sup>

## On the Edge Feature of Tanegashima Two-pattern Accent: Prosodic Analysis based on Corpora of Spontaneous Speech

児玉望

KODAMA Nozomi

### はじめに

児玉望(2012b)では、屋久島諸方言の自発談話音声資料の分析に基づいて、これらの諸方言の二型アクセントが音節連続全体のピッチ変動型を指定する「語声調」体系であり、ピッチ変異の「位置」を指定しないこと、尾之間方言を除き、これらの語声調が音韻句内部の声調単位の境界を示す境界特徴をもつことを主張した上で、これと共通の性質をもつ南九州の二型アクセントの間の系統関係について論じた。この中で、屋久島諸方言と共通の古い特徴を保持する方言として種子島方言について言及し、日本放送協会編『全国方言資料』所収の南種子町島間小平山で1959年に収録された談話資料の分析として、

#### (1) A型 LH+} B型 LHL+{

を提示した。約12分の談話資料データ全体について、この分析で仮定するピッチ変動型と境界特徴（境界下降”}”と境界上昇”{”）がどのように実現するかを詳述する。

語彙調査を中心とする種子島諸方言アクセントの先行研究では、常に「曖昧化」が焦点となってきた。西之表市方言と中種子町方言に関して二型アクセント体系を認める平山輝男(1967, 1969)でも、南種子町については、とくに曖昧で「崩壊アクセントになろうとしている集落もある」としている。しかし、談話資料の分析から、南種子町においても型の弁別が談話においては境界声調の区別によって維持されていることがわかる。また、ピッチ変異「位置」の揺れが談話においてもしばしばみられることは、これらの方言のアクセントが屋久島方言と同様の「語声調」であることを如実に示している。

### 1 実現形の揺れ

西之表市方言と中種子町方言の現地調査に基づく木部暢子(2000)は、これらの両方言を二型アクセントとした上で、このアクセントの実現形にみられる揺れについて詳述してい

---

<sup>1</sup> 本研究は科研費（課題番号 2152041100）の助成を受けたものである。

る。複数の話者の調査に基づく西之表市方言については、個人差あるいは地域差に帰せられるかもしれないという含みをもたせている。3 音節以上の長さをもつ語については、型の弁別に関わらない音声的変異として以下のようにまとめられる揺れを挙げる。

(2) a. A 型に対応する型は、 $O[O\cdots O]$ 、1 音節の助詞がついた場合は  $O[O\cdots O]$  も可

b. B 型に対応する型は、 $O[O]\cdots O$ 。3 音節の語では  $[O]OO\sim O[O]O$

これに対して、助詞が接続しない場合には区別がない 1 音節語でも区別がある 2 音節語でも、1 音節の助詞が接続した場合に型の弁別が維持できなくなるような実現形 ( $[O]\nabla$  と  $O[O]\nabla$ ) が現れる。1 音節語では揺れるのは A 型に対応する語である。2 音節語では助詞がついた場合、どちらの型も揺れて、実現形に重なりができる。

(3) a. 1 音節語単独ではどちらの型も同じ

b. 1 音節語+助詞 A 型  $O[\nabla\sim[O]\nabla]$  B 型  $[O]\nabla$  曖昧化しやすい

(4) a. 2 音節語単独 A 型  $O[O]$  B 型  $[O]O$

b. 2 音節語+助詞 A 型  $O[O\nabla\sim O[O]\nabla]$  B 型  $[O]O\nabla\sim O[O]\nabla$

木部(2000)は、先行研究の記述がこれらの変異形のいずれかのみを記述していることが、西之表方言に型の区別があるか、ないかの判断が分かれる理由であろうとする。

以上のような揺れは、次のようにまとめることもできるだろう。

(5) a. A 型：語の長さに関わらず、1 音節の助詞がつく場合にはこの助詞の直前に下降]が現れてもよい。

b. B 型：3 音節語と、2 音節語に 1 音節の助詞が加わった 3 音節の連続では、H の音節が第 1 音節と第 2 音節の間で揺れる。

(5)は、児玉(2012b)で述べた屋久島諸方言の談話資料で観察される揺れによく似ている。

(5)a は、宮之浦などの屋久島諸方言の B 型でしばしばみられる文節末音節の下降を想起させる。宮之浦方言では先行研究で 1 音節助詞の低接として分析されてきたが、談話資料では、用言や副詞を含む助詞のない場合や、2 音節以上の助詞を伴う場合でも観察される、境界特徴としての文節末下降の実現形の揺れである。この種の文節末音節の L の実現・非実現は、熊本方言のような一型アクセント(LH+)}でも観察される。

一方(5)b は、A 型の側で文節頭に LHL のピッチ変動がある屋久島諸方言の多くで、H が単なるピッチのピークであり持続しないために、聴覚的には H が第 1 音節にあるのか第 2 音節にあるのか、あるいは冒頭 2 音節全体が卓立して聞こえるかの判断が揺れる場合とよく似ている。児玉(2012a)で扱った甕島諸方言でも、文節頭で H が重起伏副頂点のピークとして現れる中甕集落や旧下甕村のアクセントで特徴的な揺れがある。いずれも音節構造に

応じて、揺れが出やすい場合と出にくい場合がある。種子島の場合も、2音節語単独の発話ではピークが1音節目、4音節以上であれば2音節目となるが、3音節文節ではその中間となり、聴覚的な判断が揺れる、と考えればうまく説明できそうな揺れとなっている。

児玉(2012a)で述べた、もう一つ大きな屋久島の語声調の特徴は、文節の長さによる型の弁別の違いである。屋久島諸諸方言の二型アクセントは、種子島の(1)とは逆のピッチ変動型の語声調(A型 LHL+, B型 方言により LH+)  $\sim$  L<H}  $\sim$  L+H}})であるとみられる。アクセント実現の単位である文節の音節数が増えると、+に先行する部分(あるいは<)が伸びて弁別が容易になるが、短い文節ではどちらの型も LHL  $\sim$  LH}のような、単なる上昇-下降のピッチ変動となり、弁別が難しい。このため、1音節では型の弁別を失っている方言がある一方、短い文節(文節のうち指定助動詞ジャ、引用の助詞テなどアクセント上独立する付属語に先行する部分を含む)では、境界特徴の違い(A型 LH}, B型 LH{)によって弁別が保たれている方言が多い。

西之表市方言でも、短い文節において[○]▽、○[○]▽のような型の弁別が困難になりそのような実現形が報告されているが、屋久島の事例は、この場合も実際には弁別がある可能性を、二つ示唆している。ひとつは、聴覚的判断により[○]と報告されている音節のピッチ曲線が異なっている場合であり、もうひとつはピッチ変動の曲線が同じであっても前後の文節との接続部のピッチ変化が異なる場合である。特に後者は、連文節環境のアクセント調査が必要になり、この点で自発談話資料音声の分析が特に有効であると考えられる。

種子島の方言談話資料としては、鹿児島県立図書館方言ライブラリ所蔵のテープが、西之表市2本、中種子町2本(80-1, 80-2)、南種子町1本(81-1)の5本とあるほか、『全国方言資料』にも南種子町島間小平山の方言談話が収録されている。これらの談話音声はいずれもよく似ており、(1)に挙げたピッチ変動型と境界声調で弁別されるアクセント体系として分析可能であると考えられる。この中で最も短く、音声データとカナ転記・訳文が公刊されており、第三者による検証も容易だと考えられる『全国方言資料』収録の音声について、談話音声全体の分析を試みる。

## 2 談話音声のアクセント分析

『全国方言資料』の談話音声は、各地点それぞれ二つの「自由会話」と、8つの場面設定(朝・夕・道で・買い物・送り・迎え・不祝儀・祝儀)をした短い会話で構成された「あいさつ」から成っており、すべてカナ転写と訳が加えられている。このカナ転写と対訳はほぼ文節単位に分ち書きされているが、この区切りを、「音韻句」に相当する単位に区切

り直した上で分かち書きしたものに、まずピッチ変動の聴覚印象（[:上昇、]:下降、[[:後続音節の上昇調、]]:先行音節の下降調）を注記し、さらに、そのうちの[と]について、アクセント（語声調）の実現単位の境界に相当する位置のものであると分析したものを境界特徴（{:上昇、}:下降）を表す記号に置き換えた。長い音韻句の2番目以降の境界では、アクセントの単位の境界と考えられる位置での上昇や下降がはっきり聞き取れず、かつ機械的なピッチ分析でもピッチ変動が視認できない場合があるが、これらは、境界声調の非実現として({})と({})で示した。対訳は、カナ転写の分かち書きに対応させ、音韻句内部のアクセント句境界は|で区切った。自立語については、アクセント型を(A),(B)のように付記したが、アクセント上独立する付属語については無印のまま残した。アクセント型を決められなかった自立語については、?で示した。間投詞や終助詞、フィラーは、音韻句の構成要素とみなさず分かち書きした。自由会話1（あかりの話）の冒頭を例にとると、以下のようになる。

#### (6) アノテーション例

ム[カシャー}マー [[デントー}チュモ [[ナシー]] マー]] ソ[ノ [[オームカシャー]]  
[ダン]]プ{チュモ ナ]シ [ナー]] [ジャッ]タ({)チュワ [ナー]]

昔(A)は|まあ 電灯(A)|という(A)のも ない(B)し まあ その(A) 大昔(A)は ランプ  
(B)|という(A)のも ない(B)し ね そうだった(B)|という(A)よ ね

ピッチ変動の表記はあくまで音声的な補助表記であり、「アクセント核」の位置を示すものではない。音韻句頭のピッチ上昇を[と]するか[[にするかはあくまで音節内での上昇が聞き取れたかどうかだけを示しており、[でもピッチ分析上は上昇が観察できるものが多い。たとえば、ランプの[ダン]]は、音節内で上昇と下降があるが、どちらかといえば下降のほうで聞き取った、ということを示している。東京方言の[ラン]]プとは聴覚的にかなり異なるが、これを表記上区別することは試みていない。同じ語形である[[ナシー]]とナ]シは、どちらも音節間にピークがありシの音節全体でピッチ下降があるが、二つの語形のうち前者の実現形が長く(0.44s)後者が短い(0.17s)ことにより聴覚印象が異なることを表記している。

これに対して境界声調の“{”と“}”の使用は音韻的解釈によるものであるが、( )の使用は聴覚印象に拠っている。たとえば、独立するチュ「という(A)」は、先行するアクセント句がA型であれば“}”、B型であれば“{”の後に現れるが、3つ目の例({)チュワでは、先行するピッチ下降が止まってワに向けてわずかにピッチが上昇していることから、境界特徴が

ピッチの動きに関与していることは明らかなものの、実際には上昇が聞き取れないために (f) を使用している。

このような形式のアノテーションを談話音声の音声転記全文に施した。検証の便宜を考えると全文を公開することが望ましいが、タグを施す前の原文が著作物として公開されているものであり、著作権上、改変等の問題が発生する虞があるため、本稿では、アノテーション全文を音韻句で句切り、訳文と出典箇所を1レコードとするデータベースとした上で、分析結果に該当するデータを列挙する形で引用することにする。

レコード数は 1112 で、このうち、アクセント体系外とした 317 (間投詞 オーヨン「はい」、マ「まあ」、終助詞ヤーン、ナーラン、ヨン等) を除く 785 のデータについて型の弁別とアクセントの実現単位の句切りを施した。単一のアクセント実現単位(「文節」が基本であるが、アクセント句統合のあるものや、独立する付属語に先行する部分を含む)から成る音韻句が、A 型 225、B 型 208、不明 33(うち 23 が副詞モー)の 466、2 単位から成る音韻句が A 型+A 型 20、A 型+B 型 39、B 型+A 型 59、B 型+B 型 47、後分が独立する付属語で型の決定を保留したものを中心とするその他 67 の 232、3 単位以上から成るもの 87 である。論文末尾に 244 の分析データを分類して資料として掲載した。

### 2.1. ピッチ実現形の変異

音韻句の冒頭は、ピッチの上昇で特徴付けられる。句頭音節が（音節全体が有声となるような）長音節であれば、ほぼ一貫して音節内の上昇が聞き取れる。例外は1音節語や一部の2音節語で音節末に下降がある場合であるが、この場合でもピッチの上昇曲線はある。これに対して、句頭音節が短い場合や、促音・無声摩擦音など後半が無声となるような長音節の場合には、音節間で上昇が聞き取れて、LHとなる場合が基本である。

- (7) a. ホ[シ]モンモ                      干し物(B)も                      あいさつ 5  
      b. ホシ[モン]]モ{シタリ          干し物(B)も|したり(A)          あいさつ 5

7b では、シが無声化しているため上昇が遅れる。無声でなくても、8a のように母音が脱落して第2音節が短い場合には同様の上昇の遅れがある。語頭以外のガ行子音は鼻音化している。

- |                |          |        |
|----------------|----------|--------|
| (8) a. マゴ[ジョ]ガ | 孫(B)が    | あいさつ 8 |
| b. マ[ゴ]ジョモ     | お孫さん(B)も | あいさつ 8 |

同様な例外はほかに次のようなものがあつた。

- (9) a. ココ[ノ]ツ{イツ{チェラー}トウユーチェ

- 九つ(B)|はいつ(B)|ている(A)よ」|と言って(A) 自由会話 2
- b. トガ[ミョー]]ゴ{ヤットイ 咎め(B)たくは|ある(B)んだよ 自由会話 2
- c. トリ[カ]エシモ{ナラン{コッ}チャ({)カラー 自由会話 2
- 取り返す(B)ことも|できない(B)|こと(B)だ|から あいさつ 7
- d. トシ[ヨ]レ{ヨッタ{モン({)ジャカラ 自由会話 2
- 年寄り(B)|だった(B)|もの(B)|だから あいさつ 7
- 逆に、上昇が早く、冒頭短音節が H に聞こえるものの中には、強調などイントネーションが関わっていると考えられる例もある。
- (10) a. [[アザイ]]ナ{レキ}ガタ{ジャ たいそうな(B)|できかた(B)|だ(B) あいさつ 3
- b. [[イエモ]] どうしても(B) 自由会話 1
- しかし、大多数は、後続の第 2 音節でピッチのピークに続く下降が開始され、この下降との関係で H]L のように知覚される場合で、しばしば L[H との間での揺れが観察される。この種の揺れは、資料の中では 2 音節の文節にほぼ限られるようである。
- (11) a. [メ]シモ{クワンジー 飯(B)も|食わずに (B) あいさつ 2
- b. メ[シ]モー 飯(B)も あいさつ 2
- (12) a. [フ]ロモ 風呂(B)も あいさつ 2
- b. フ[レー]]モ 風呂(B)にも あいさつ 2
- (13) a. [ジェ]ニガ 金(B)が 自由会話 1
- b. ジェ[ニヤー]] 金(B)は あいさつ 4
- (14) a. [イ]ロイロト{マー いろいろと(B)|まあ あいさつ 7
- b. イ[ロ]イロト{マー]] いろいろと(B)|まあ あいさつ 7

一見例外に見える(11)a, (12)a, (13)a は、(7)-(9)と同様な母音脱落による音節縮約形ともみられ、また、(14)a は、重複部の間にアクセント単位の境界({)を置く解釈もできよう。

二音節語では、9 回の句頭への出現が専ら H]L で揺れない[ジャッ]タ「そうだった(B)」のような語もあるが、第 2 音節が短い 2 音節語では、A 型でも B 型でも H]L と L]H の両方が現れており、後続の語がなければ型の判断に苦しむ語形となっている。ただし、このような語形で第 2 音節が長く伸びた L[H 形があれば、第 2 音節の下降のピッチ曲線で型の判断がつく場合がある。

句頭音節の上昇の後、A 型では H が維持されるのに対して、B 型ではピークに達した後ですぐ下降を開始する。この B 型の下降の開始位置は文節の音節構造により異なるが、第 2 音節が長い場合にはこの音節の開始位置付近にピークがあるとみられ、第 2 音節の下降

が聞き取れる場合がほとんどである。ただし、この場合でも、第1音節が長い場合には上昇側と下降側のどちらをHと聞くかにより[[H]Lと聞くかL[H]]の判断に迷う場合がある。

- |                   |           |        |
|-------------------|-----------|--------|
| (15) a. [[ヨージン]]ノ | 用心(B)を    | あいさつ 5 |
| b. [[ヨー]ジンノ{マ     | 用心(B)を まあ | あいさつ 5 |
| (16) a. [[ダンピー]]  | ランプ(B)に   | 自由会話 1 |
| b. [[ダン]ピー        | ランプ(B)に   | 自由会話 1 |

また、強調的な延伸で第2音節が高平となっているとみられる例もある。

- |              |         |        |
|--------------|---------|--------|
| (17) ヒ[トー]ツモ | ひとつも(B) | あいさつ 6 |
|--------------|---------|--------|

第2音節が短い場合には、ピークがどこに来るかは文節全体の長さに応じて変動するとみられる。

- |               |          |        |
|---------------|----------|--------|
| (18) a. イ[マ]] | 今(B)     | あいさつ 1 |
| b. イ[マ]モー     | 今(B)も    | 自由会話 2 |
| c. イ[マ]ゴロノ    | このごろ(B)の | 自由会話 2 |

18aでは、ピッチのピークは第2音節冒頭にあり、マは全体が下降調である。18cでは、ピークが第2音節末尾であり、マは緩やかな上昇調となっている。ただし、B型のピークは第2音節の末尾より後ろに来ることはないともみられ、アクセント単位が3音節以上であれば末音節は必ずLである。

アクセント単位が2音節以下の場合、音韻句末では(18)aのように下降が実現するが、連文節環境で上昇境界声調{が後続する場合には、この下降が現れない場合がある。

- |                 |             |        |
|-----------------|-------------|--------|
| (19) a. イ[マ{カーイ | 今(B) か      | あいさつ 6 |
| b. イ[マ]]{ヤッタ    | 今(B) だった(B) | あいさつ 6 |

(19)bの上昇境界声調は、ピッチ上昇が小さく「音調の谷」として実現するが、先行するB型の下降を欠く場合は上昇幅も大きくなる。(20)は、可能否定の構文で用いられる一音節副詞の用例である。

- |                     |                   |        |
|---------------------|-------------------|--------|
| (20) a. エ{ミシケン]]{カラ | よく(B) 見つけない(B) から | あいさつ 4 |
| b. エ[モ{コン]]ジー       | よく(B) 来ず(B)に      | あいさつ 8 |
| c. エ[モー]]           | どうしても(B)          | あいさつ 7 |

長い1音節の場合、下降が現れて「音調の谷」となる場合とならない場合がいずれも出現している。

- |                   |                 |        |
|-------------------|-----------------|--------|
| (21) a. [[ロー{シェ]モ | どう(B) しても(A)    | あいさつ 5 |
| b. [カン]]{テア{カラ    | 食べる(B) のだ(B) から | 自由会話 2 |

- |                      |                |               |
|----------------------|----------------|---------------|
| (22) a. ナッ[ト{ショーカイ}] | 何と(B) しよう(A)か  | 自由会話 2/あいさつ 5 |
| b. [ナッ]{カラ           | ない(B) から       | あいさつ 1        |
| c. [ナッ]{チョラント        | なっ(B) てない(A)んだ | 自由会話 2        |
| d. [ナッ]]{チュラン]ト      | なっ(B) てない(A)んだ | 自由会話 2        |

A 型では、句頭の上昇の後、アクセント実現単位の末尾まで高平が続いてもよいが、最後の音節には任意に L が現れてもよい。この L の出現の条件は、音韻句末であるかあるいは音韻句内部で下降境界声調に先行する場合かに関わらないようである。同じ環境で揺れている場合も多い。

- |                          |                   |        |
|--------------------------|-------------------|--------|
| (22) a. [[テンキモ]]         | 天気(A)も            | あいさつ 1 |
| b. [[テンキモ                | 天気(A)も            | あいさつ 5 |
| (23) a. [[スイモン]]}ジャッ]タカラ | する(A)もの だった(B)から  | 自由会話 1 |
| b. [[スイモン}ジャッ]タトイ        | する(A)もの だった(B)んだよ | 自由会話 1 |

この 1 音節の下降調は、]]で表記している場合でも、注意しなければ L に聞こえる場合が多い。特に、音節数の多い音韻句では、1 音節あたりの長さが短いため、長音節の場合でも下降として聞き取るのは難しくなる。3 音節の L[H(HL)]や 2 音節の L[(HL)]では、長音節を含む場合には B 型の L[(HL)]L や(LH)[(HL)]との違いがピッチ曲線の違いとして聞き取れる場合もある。たとえば、キ[レーニ]「きれいに(A)」の出現例(3 例)では、レーが下降調にならないことから、ニが低い場合も含めて A 型であると判断できる。しかし、このような例はむしろ例外的で、特に、2 短音節から成る H]L や下降長音節の 1 音節語では、ピッチ変動だけで型の弁別を維持することはほぼ困難であろうと考えられる。多くの場合、型の判別には連文節環境での境界特徴を参照した。

- |                         |                |        |
|-------------------------|----------------|--------|
| (24) a. [[ユーモン]]({)ジャッタ | 結う(B)もの だった(B) | 自由会話 1 |
| b. [[スイモン]]}ジャッ]タカラ     | = (23) a.      |        |

自立語の中で、型所属が不明とした語の多くは、1 音節または 2 音節で、連文節環境での出現例が出現しなかったものである。

- |                  |            |        |
|------------------|------------|--------|
| (25) a. モ〜モー(]]) | もう         | (頻出)   |
| b. [[ケ]          | ここに(B?<コケ) | あいさつ 6 |
| c. ジッ[サイ]]       | 実際(B?)     | 自由会話 1 |
| d. ジョッ[コ]リ       | ひょっこり(B?)  | 自由会話 2 |
| e. ヌ[ルッ]ト        | ゆっくりと(?)   | あいさつ 2 |
| f. ヨ[ホーッ]ト       | そうっと(?)    | 自由会話 2 |



(25)e と(25)f は、副詞末尾のトを、独立する付属語としてトと解釈するかどうかの判断も関わってくる。ただし、このようなトに終わる副詞（句）で、B 型+助詞トの{トに終わっている例はない。副詞ズットは、[[ズット/[ズット]]/[ズーット] の出現例で文節全体として A 型のアクセント実現単位であると判別できる。

## 2.2. 語彙の対応

先行研究で種子島方言の二型は鹿児島方言の二型とよく対応していることが知られるが、全国方言資料でも、A 型/B 型は、ほぼ鹿児島方言のものと対応している。このため、紙数の関係もあり、語彙リストは掲載しない。ただし、対応が異なる場合についてすこし触れておく。

資料で明らかに鹿児島方言と型が対応しない名詞は、以下の三例である。

- |                        |               |        |
|------------------------|---------------|--------|
| (26) a. [ヒャク{ゴジツ}キンイリノ | 百(B)五十斤(B)入りの | 自由会話 1 |
| b. ヒャ[ク]エンノ{トーン        | 百円(B)の の(A)を  | あいさつ 4 |
| (27) ナ[ガ]ビョーキジェ        | 長患い(B)で       | あいさつ 7 |

平山輝男(1969)の語彙リストでは、「百」は、/hjaku/ であり、鹿児島方言の A 型に対応する。(26) のデータでは、「百」を A 型であると解釈するためには、26a-b 共に、単位名詞の「斤」「円」の直前でアクセント実現単位の境界があるとみなし、「百五十」が 1 アクセント実現単位として A 型になっている、と考えることになるが、他の単位名詞の出現例では数詞と複合語を形成して全体で 1 アクセント単位となっており、「一〜」以外は（一般複合語規則に従い）数詞の型で現れて鹿児島方言と同じになる。(27)は、「長い」と同じ型であることが予想される複合名詞であるが、この形容詞は平山の語彙リストでも B 型と解釈される音形で記述されており、鹿児島方言（及び屋久島と薩南諸島の諸方言）の A 型と一致しない。

形容詞では、「久しぶり」を意味する形容詞に、全国方言資料は「遠々しい」という語源を当てている。「遠い」が鹿児島方言では A 型になるのと食い違う型になる。

- |                   |            |              |
|-------------------|------------|--------------|
| (28) [[トーロー]]シカッタ | 久しぶりだった(B) | あいさつ 3 (2 回) |
|-------------------|------------|--------------|

重複を含む副詞「とうとう」は、B 型と解釈できそうな揺れた実現形となり、鹿児島方言と食い違う。ただし、(29)a を鹿児島方言でもしばしば見られるような反復した 2 アクセント単位での実現とみて、この場合は A 型とする解釈の余地はある。

- |                 |            |              |
|-----------------|------------|--------------|
| (29) a. [[トー]トー | とうとう(B)    | あいさつ 7 (2 回) |
| b. [[トートー]]{マー  | とうとう(B){まあ | あいさつ 7       |

平山(1969)の中種子町の語彙リストの動詞には、「殺す」(B?)「減る」(B?)「助ける」(A?)「忘れる」(B?)「生まれる」(B?)など、少数の動詞で鹿児島方言との型の食い違いがあるが、これらの中で出現例があるのは「生まれる」だけであり、鹿児島方言と同じA型で出ている。これは、平山リストに記載されている末音節の低い動詞形の中に、A型末音節が低く実現するデータが混入している可能性を示唆するものであるかもしれない。

(30) a. ウ[マレジ]]}ジャッタ({})チュチェ

生まれて(A)|だった(B)|と言って(A) あいさつ 8

b. ウ[マレタンロー]] 生まれただろう(A) あいさつ 8

c. ウ[マレチ 生まれて(A) あいさつ 8

### 2.3. 境界声調

南種子方言の連文節構造のアクセント実現は、鹿児島方言などと同様に、二種類に大別できる。ひとつは、平山輝男の一般複合語規則の連文節への適応で、連文節全体が一つのアクセント実現単位となり、連文節構造の第一文節の型で実現する場合である。鹿児島方言と同様、アクセント型をもたない付属語が後部要素となる文節では義務的に単位の統合が適用されるのに対して、アクセント型をもつ各文節の統合は、任意に起きることが多い。たとえば、「用言連体形+もの(B)|だった(A)」のような構造では、用言連体形とモン〜ムンが統して一単位となる場合とモン〜ムンがB型のアクセントで実現する場合に分かれる。

後者、すなわち、平山輝男の特殊複合語規則が適用された連続で、間に音韻句の境界が入らない場合は、音韻句頭以外の位置では、アクセント単位冒頭のLHの上昇が抑制され、代わって「境界声調」が現れる。先行するアクセント単位がA型であれば下降、B型であれば上昇であるが、音韻句頭の上昇と比べると、時間もピッチ幅もずっと小さい。A型の末音節Hからの下降と、B型の末音節Lからの上昇が、それぞれ音節境界付近で実現している、というようなピッチ変動である。短いB型文節の末音節が下降調の場合には、「音調の谷」のような不連続として短い上昇がある。

B型の下降も、句頭の上昇がなく境界声調に続いて現れる場合には、開始が早く、最初の音節で下降調や下降が実現しているように聞こえる例も多い。ピッチの下降幅も、句頭の上昇がある場合と比べて小さいため、B型アクセント句全体での緩やかな下降となり、特定の位置での下降を知覚できない例もある。これに対してA型では末音節の開始まではピッチが維持されて平進するピッチ形となる。短いアクセント句では、ピッチ曲線から型を判別することが、音韻句の冒頭（語が単独で音韻句をなす場合を含む）と比べてさらに

難しくなり、後続のアクセント句との接続部の境界声調のみが型を判別する手がかりとなる。この境界声調も、短い文節が多数連続した複雑な構成をもつ音韻句では、特に後ろのほうで聞き分けが難しくなる。付属語の中には、短い音韻句で独立しているものでも、このような長い音韻句で独立しているかどうかの判定ができなかったものもある（バカリ、バッチェ「けれども」、カラなど）。また、付属語の場合、後続要素がないため、型の判別は困難になる。

このような点を考慮して、資料としては、二つのアクセント単位の組み合わせを中心に、A+A、A+B、B+A、B+B に分類してリストアップし、それぞれの後ろに（今後分析が変わるかもしれない）参考例として、これらの組み合わせではじまる三つ以上のアクセント単位の連続を配置した。

談話資料全体を通して、先行語彙ごとの境界声調の実現にはほとんど揺れがみられないことがわかり、南種子町のアクセントでも型の弁別は維持されていると言ってよいと思われる。屋久島方言の場合と異なり、B 型末の上昇境界声調{は、アクセント単位の長さに関わらず実現する。実のところ、この体系の本質は、境界特徴の弁別である、とみることも可能である。(1)であげたピッチ型 A 型 LH+}、B 型 LHL+{のうち、冒頭の上昇 LH が音韻句頭の境界特徴の実現であるとすれば、残る H+(L)と HL+はそれぞれ境界声調}と{とを実現するための冒頭ピッチが可変長で実現している、とみることができる。B 型の L+は、短いアクセント単位では実現しないこともあるが、この場合も{は必ず実現する。}の下降が直前の音節内部で開始する現象は、屋久島をはじめ、同様の境界声調が仮定される体系にしばしばみられる。鹿児島方言の B 型ではこのような下降の早目が起きないが、これは鹿児島方言の二型の対立が、下降境界声調の早い実現(A 型)と遅い実現(B 型)であり、下降が早まらないことが直接的に弁別に関与しているからである。

種子島方言と屋久島方言の談話音声分析は、南九州の二型アクセント（語声調）体系において境界特徴が重要な役割をもっていることをよく示している。「声調」には、ある単位の内部で実現するピッチ変動だけではなく、「境界」をピッチでどのように示すかも含まれるわけである。二型アクセントだけでなく、「位置のアクセント」をもたない体系では境界特徴を記述する必要があるだろう。日本語全体を見渡すと、東京アクセントのような「位置のアクセント」の体系の中にも、無核型のような、「ピッチで音韻句内部の境界を示してはならない」という境界特徴をもつ型もあり、このような境界特徴の違いがどのような歴史的経緯を経てきた成立したのか、という問題設定も可能だと思われる。

<資料：連文節構造の韻律分析例>

(31) A 型+A 型

1. [[オイモ}コラー	俺(A)も これ(A)は	あいさつ 2
2. キ[カシエ}スイヒトモ	聞かせ(A) する(A)人も	自由会話 2
3. キ[シエテ}クレー]]	着せて(A) くれ(A)	あいさつ 8
4. キ[レーニ]]}ヒシエ	きれいに(A) して(A)	自由会話 2
5. シエ[シェン]]}ソノ	とても(A) その(A)	自由会話 2
6. ソ[ノ}ヒトー	その(A) 人(A)を	自由会話 2
7. ソ[ノイエ]]}ヒター]]	その(A)家の 人(A)は	自由会話 2
8. [[ツンジェ()}モローチェ]]	積んで(A) もらって(A)	あいさつ 1
9. [[デントー}チュモ	電灯(A) という(A)のも	自由会話 1
10. [トー]]}アケチ]]	戸(A)を 開けて(A)	自由会話 2
11. [[トー}クレタ	十(A) くれた(A)	自由会話 1
12. [[ドンガ()]コラ	私たち(A)が これ(A)は	自由会話 1
13. ナ[ガタヤマー]]}イタチェ]]	永田山(A)へ 行って(A)	自由会話 1
14. [[ナジャ}ユーチェモ	何と(A) 言っても(A)	あいさつ 7
15. [[ハイメチェ}ソラー	はじめて(A) それ(A)は	あいさつ 8
16. [[ホーシエ}マ]タ	そして(A) また(A)	自由会話 2
17. ム[カシノ]]}ヒトノゴト]]	昔の(A) 人(A)のように	自由会話 2
18. モ[ローチェ}イコー	貰って(A) 行こう(A)	あいさつ 4
19. ヨ[ノナカワ]]}カーラ	世の中(A)は これ(A)は	自由会話 2
20. ヨ[ロー]チャ}アノ]]	寄り合って(B) あの(A)	あいさつ 1

(参考) A 型+A 型ではじまる長い音韻句

ア[メオ()]カーニ()]イケバ	飴(A)を 買い(A)に 行けば(A)	自 1
イ[レタママ]]}シェイ]]}シト]モ	入れた(A)ままに する(A) 人(A)も	自 2
[オッ]]}ト}ヤロ	いる(A) の(A) だろう(B)	自 2
オ[ラチャ}コ]ラ}モ	私(A)は これ(A)は もう(?)	あ 8
[ソー]]{センバ}コ]ラー	そう(A) しなければ(A) これ(A)は	あ 7
[[ソーシエ}ソラ]]}アノ]]	そして(A) それは(A) あの(A)	自 1
ネ[ギラレチャン}スイモン]]}ジャッ()]タバッチャ	睨まれたり(A) する(A)もの だった(B)けれど	自 2
ヒ[シェー]]タ}ト	して(A) いた(A) んだ	自 1

モ[ラアン}ホーガ}ヨカト	もらわない(A) ほう(A)が いい(B)と	自 2
[[ユー}ヒトモ]]オル	言う(A) 人(A)も いる(A)	自 2
[[ユーコター]]ユー(())パツチェ	言う(A)ことは 言う(A) けれど	自 2

(32) A 型+B 型

1. イ[ケンジ}ジャツタ	いけなくて(A) だった(B)	あいさつ 7
2. イ[タ]チ}コー	行って(A) 来る(B)	あいさつ 5
3. イ[タチェ]](())コイ	行って(A) 来い(B)	あいさつ 3
4. イ[タ]チェ}コイ	行って(A) 来い(B)	あいさつ 5
5. イ[タチェ]]}ミ}テ	行って(A) みて(B)	あいさつ 3
6. イ[タチェ}ミロー]]ワイ	行って(A) みよう(B)や	あいさつ 1
7. イ[チエン]]}ジャ}ラ	一円(A) だよ(B)	自由会話 1
8. [[オイガ(())ニモ}ツモ	俺(A)の 荷物(B)も	あいさつ 1
9. [[オーイリ}モン]]カイ	おられる(A) もの(B)か	自由会話 2
10. [[カーニ}キタ	買いに(A) きた(B)	あいさつ 4
11. [[ゲンキ}ジャケリヤー	元気(A) です(B)か	あいさつ 3
12. [[コーガ}ナシー	効(A)が なく(B)	あいさつ 7
13. コ[モ}ナシー]]	子(A)も なく(B)	あいさつ 8
14. [[サンシェン]]}グ}ライ	三銭(A) ぐらい(B)	自由会話 1
15. [[シェバ}ヨカ]パツチェー	すれば(A) いい(B)けれど	あいさつ 2
16. [[シェンバ}ジャカラン	しなければ(A) だ(B)から	あいさつ 5
17. シ[タモン}ジャツ]タロー	した(A)もの だったろう(B)	自由会話 1
18. シ[ランモン]]}ジャツ(())タ	知らないもの(A) だった(B)	自由会話 2
19. [[スイモン]]}ジャツ]タカラ	する(A)もの だった(B)から	自由会話 1
20. [[スイモン}ジャツ]タトイ	する(A)もの だった(B)んだよ	自由会話 1
21. セ[スムン}ジャツ(())タ	そうする(A)もの だった(B)	自由会話 1
22. ソ[アン]]}コター	そんな(A) こと(B)は	自由会話 2
23. [ソー]]}ジャ	そう(A) だ(B)	自由会話 2
24. [ソー]]}ジャツ]トイ	そう(A) なんだ(B)よ	自由会話 2
25. [[ソー}ジャ]ラエ	そう(A) だ(B)わよ	自由会話 2
26. ソー}ジャラヨ	そう(A) ですよ(B)	自由会話 2

27. [[ソー}ヤツチェ	そう(A) なって(B)	あいさつ 7
28. [[ターチャッタ}モネー]]	焚いていた(A) もの(B)だし	自由会話 1
29. [[ターテ}ミ]レー	焚いて(A) みなさい(B)	自由会話 1
30. [[チョーリョ}ヨッ]カラ	ちょうど(A) いいから(B)	あいさつ 5
31. ノ[ボッチ}キオイ	上って(A) 来ている(B)	あいさつ 3
32. [[パンツケ}ジャツチ	晩方(A) であって(B)	あいさつ 4
33. ヒ[クムン}ジャツタ	歌うもの(A) だった(B)	自由会話 2
34. ヒシエ}コン]]パイ	して(A) 来なさい(B)	あいさつ 5
35. ヒ[トノ}イ]エー	人の(A) 家(B)に	自由会話 2
36. ム[カシノ]]サトー]]ワ	昔(A)の 砂糖(B)は	自由会話 1
37. ム[カシモ]]イマ]モ	昔(A)も 今(B)も	自由会話 2
38. [[ロンガオヤジ]]ナン]]ラ	私たち(A)の父親 なんか(B)が	自由会話 2
39. [[ロンガジダイワ}マー]]ラ	私(A)の時代は まだ(B)	自由会話 1

(参考) A 型+B 型ではじまる長い音韻句

ア[カロージュ]]クイゴタイ(())カラ	明るんで(A) 来る(B)ようだ から	あ 1
ウ[マレジ]]ジャツタ(())チュチェ	生まれて(A) だった(B) と 言って(A)	あ 8
[[オイノ(())オ]ヤジャー{アラ]]	俺(A)の 親父(B)は あれ(A)は	自 1
カ[ワイ}ジャ(())カラ	変わり(A) だ(B) から(?)	自 2
[[ゲンキ}ジャ]ライ{マー	元気(A) だ(B)よ まあ	あ 3
ジ[シェー}ヤ{トユーチ]]	時勢(A) だ(B) と 言って(A)	自 2
シ[タタメ}チュー{カラン]]	したため(A) てある(B) から	あ 5
[[スンモン}ジャツタ{テ(())ヤ(())カラ	する(A)もの だった(B) の(A) だ(B) から	自 2
ソイ}ジョッ(())カラ	それ(A) でいい(B) から	あ 4
[[ソー}オモツ(())チャロー]]	そう(A) 思っ(て)(B) だろう(B)	あ 6
ソ[レ}グラエ{ジャツ[タ(())ト]オ[モー]]ガ	それ(A) ぐらい(B) だった(B?)と 思(う)(B)が	自 1
[[タイヘンナ}コッ(())チャラー]]	大変な(A) こと(B) だ(B)わ	自 1
ワ[ザワイナ}トガ]ムイ(())モン(())ジャツタト	大変な(A) 咎める(B) もの(B) だった(B)んだ	自 2

### (33) B 型+A 型

1. [イ]エ{イダチェ	家(B)へ 行(っ)て(A)	自由会話 2
2. [[イエー{イダチェ	家(B)に 行(っ)て(A)	あいさつ 2

3. イ[ソ]ギ{オヨバンカラ}}	急ぐには(B) 及ばない(A)から	あいさつ 4
4. イ[チ]ゴ-({})チューガ	一合(B) という(A)のが	自由会話 1
5. イッ[キ]{オイモ	すぐに(B) 俺(A)も	あいさつ 4
6. イ[マーッ]({})ター}}	今の(B) もの(A)は	自由会話 2
7. イ[マン]]{ヒター	今の(B) 人(A)は	自由会話 2
8. [[イモー]]{チャー}}	今(B)は という(A)と	自由会話 1
9. [[イワン]]{ヒター	今(B)の 人(A)は	自由会話 2
10. [[オイワイ]]モーソー{トイッチェ}}	「お祝い申そう(B)」 と言って(A)	自由会話 2
11. オ[モー]]{チェットコイ	思っ(B) ている(A)ところ	あいさつ 1
12. オ[ユ]ワエオ{シテ}}	お祝い(B)を して(A)	自由会話 2
13. カ[シエ]オ{シシエ	加勢(B)を して(A)	自由会話 1
14. ク[サイ]]モンノ({})ウタジェモ}}	「供祭文(B)」の 歌(A)でも	自由会話 2
15. [ク]リヨ{ヒッキッター	くれ(B)を 引き(A)切ったり	自由会話 1
16. [[クワー]ピョノ{シガーモー	看病(B)の しがい(A)も	あいさつ 7
17. コ[ヤ]ウケアエオ{ヒシエ	小屋請け合い(B)を して(A)	自由会話 1
18. コ[ヤ]ウケヤーオ{ヒシエ	小屋請負(B)を して(A)	自由会話 1
19. [[サイフ]オ({})コラ	財布(B)を これ(A)は	あいさつ 4
20. シエ[キ]ヨー{コー	石油(B)を 買う(A)	自由会話 1
21. [[ジェ]ジェ{イクトキモ}}	出で(B) 行く(A)ときも	自由会話 2
22. [ジャッ]]タ({})チュワ	そうだった(B) という(A)よ	自由会話 1
23. シ[ラ]ワラオ{シシエ	ばか笑い(B)を して(A)	自由会話 2
24. ス[ス]クッ{}チューチェ	煤ける(B) って言って(A)	自由会話 1
25. [[セークワ]]ツォー{シシエー}}	生活(B)を して(A)	自由会話 1
26. [[セシ]ノ{シテッタゴト	施主(B)が して(A)おいたように	自由会話 2
27. [[ダイ]ソーロー{スラー	大騒動(B) する(A)わ	自由会話 2
28. [[タエ]マツオ{ターチェ}	松明(B)を 焚いて(A)	自由会話 1
29. [[タエ]マトウー{ターチェ}}	松明(B)を 焚いて(A)	自由会話 1
30. [[タエ]マトウオ{ターチェー}}	松明(B)を 焚いて(A)	自由会話 1
31. [[ダンザ]ツイ{アケチ	乱雑に(B) 開けて(A)	自由会話 2
32. [ダン]]ブ{チュモ	ランプ(B) という(A)のも	自由会話 1
33. [[トーツ({})チェットイ}}	通っ(B) てる(A)んだよ	自由会話 2

34. デ[ケ]チェ{イイ	できて(B) いる(A)	あいさつ 3
35. [[ドーン]ト{タイチェラー}]	どんと(B) 炊いて(A)ある	あいさつ 2
36. ト[ガ]ムッ({)テューチェ	咎める(B) と言って(A)	自由会話 2
37. [[ドゴー]]サバツカリ{ア]リヤ	どれぐらいばかり(B) あれ(A)は	自由会話 1
38. トッ[テ]モ{シヨル}]	とても(B) している(A)	あいさつ 3
39. [[ナイツ]チョー{ジュテ	何十丁(B) とって(A)	自由会話 1
40. [ナッ]]{チュラン]]}ト	なっ(B) てない(A)んだ	自由会話 2
41. [ナッ{チョラント	なっ(B) てない(A)んだ	自由会話 2
42. ナッ[ト{ショー]カイ	何と(B) しよう(A)か	自由会話 2
43. ナッ[ト{ショー]カイ	何と(B) しよう(A)か	あいさつ 5
44. [[ナン]トカ({)ト	何(B)とか と(A)	自由会話 1
45. ニ[モ]トゥオ{ツンデ	荷物(B)を 積んで(A)	あいさつ 1
46. ハ[イツ]チ{イクトキヤー	はいって(B) 行く(A)ときは	自由会話 2
47. ハ[シェー]]{イコート	長谷(B)へ 行こう(A)と	あいさつ 1
48. ヒヤ[ク]エンノ{トーン	百円(B)の の(A)を	あいさつ 4
49. ブス]トモ{イワント	なんとも(B) 言わない(A)んだ	自由会話 2
50. フ[レー]]{イロー	風呂(B)に 入ろう(A)	あいさつ 6
51. フ[ロ]ミズモ{クンダリー	風呂水(B)も 汲んだり(A)	あいさつ 2
52. ホ[カ]モ{アーター]]	外(B)も 掃いたり(A)	あいさつ 2
53. ホシ[モン]]モ{シタリ	干し物(B)も したり(A)	あいさつ 5
54. マ[トゥ]オ{ターテ]]	松(B)を 焚いて(A)	自由会話 1
55. モッ[チェ]]{イケ	もって(B) いけ(A)	あいさつ 4
56. [[ライ]ソロ{シシエ	大騒動(B) して(A)	自由会話 2
57. [[ランダ]ディー{ヒシエ]]	乱雑に(B) して(A)	自由会話 2
58. [[ロー{シェ]モ	どう(B) しても(A)	あいさつ 5
59. ロ[ケー]{イッカイ]]	どこ(B)に 行く(A)か	あいさつ 3

(参考) B型+A型ではじまる長い音韻句

イッ(チェック)モン({)ジャタ]ト	はいって(B) 行く(A) もの(B)だった(B)んだ	自 2
イ[マ]ノ{ヨノナコー}コ]ラ	今(B)の 世の中は(A) これ(A)は	自 1
ク[ラ]シオ{シタモン}ジャシ]タ{ト	暮らし(B)を した(A)もの でした(B) の(A)	自 1
[シン]]ボ{シタ}ワ]ケ}ヤ	辛抱(B) した(A) わけ(?)だ	自 1



ツ[ケ]]{オヨバン}カラ	つけるに(B) 及ばない(A) から	あ 4
ナ[カッ]タ{ト()}ヤ{()}カラ	なかった(B) の(A) だ(B) から	自 2
ナッ[チェラン]]{()}コトウナンロ	なっ(B) てない(A) こと(B)なんか	自 2
ハ[リ]アグウ{ヒト}チューガ	張り上げる(B) 人(A) という(A)のが	自 2
フ[レー]]モ{イランバ}ジャガエー	風呂(B) にも 入らなければ(A) だよ	あ 6
[マ]トー{ターダト}ヨ	松(B) を 焚いた(A)んだ よ	自 1
モ[ミー]{イコー{}}トモー]]チェ	打ちに(B) 行こう(A) と思って(B)	あ 1
ヤ[マー]]{イコート}モー]]チェーガ	山(B) に 行こう(A) と思っ(B) ている(A)が	あ 5

### (34) B 型+B 型

1. ア[メ]]{ホラン{}}バー]]	雨(B) が 降らなければ(B)	あいさつ 1
2. [[イー{コ}ター	いい(B) こと(B)は	あいさつ 6
3. イ[ク]ラ{()}アイカイ]]	いくつ(B) ある(B)か	自由会話 2
4. イッ[パー]]{ノー]]ジカラ	一杯(B) 飲んで(B)から	あいさつ 6
5. イ[マ]]{ヤッタ	今(B) だった(B)	あいさつ 6
6. ウ[スン]]{ナカー]]ニヤー	臼(B) の 中(B)には	自由会話 2
7. ウ[ソー]]{オケー]]↑チエー]]	臼(B) を 起こして(B)	自由会話 2
8. ウッ[タッ]チェ{コイ	打ち立って(B) 来い(B)	あいさつ 1
9. [[エー{()}コ]ト	いい(B) こと(B)が	あいさつ 3
10. [[エー{コ]ト	いい(B) こと(B)	あいさつ 3
11. エモ{コン]]ジー	よく(B) 来ず(B)に	あいさつ 8
12. [カ]ルチ{キタカラ	担いで(B) 来た(B)から	あいさつ 6
13. [[カンジェ]チェ{ミレ	数えて(B) みろ(B)	自由会話 2
14. ク[サイ]]モンー{ナン]]デーモ	「供祭文(B)」 なんか(B)にも	自由会話 2
15. ゴ[ク]ロー{ジャッタ	ご苦労(B) だった(B)	あいさつ 6
16. シ[カ]トー{ナコー]]エ	仕方(B) がない(B)よ	あいさつ 7
17. [ジャ]{()}コテ	そうだ(B) こと(B)だろう	あいさつ 8
18. ジャ{()}ジャ	そう(B) そう(B)	自由会話 2
19. ジャ{ジャ	そう(B) そう(B)	自由会話 2
20. [ジャッ]タ{()}モネー	そうな(B)んだ もの(B)ね	自由会話 2
21. [ジャッ]タ{コテー	そうだった(B) こと(B)でしょう	自由会話 1

22. [ジャッ]タ{モネー	そうだった(B) もの(B)	自由会話 1
23. [ジャッ]タ{モネー	そうだった(B) もの(B)	自由会話 1
24. [ジャッ]タ{モネー	そうだった(B) もの(B)	自由会話 1
25. [ジャッ]タ{モネー	そうでした(B) か(B)	あいさつ 3
26. [ソシ]コ{ヤッ}パイ	それだけ(B) やっぱり(B)	自由会話 1
27. [[チャッ]タ{コテー	そうだった(B) こと(B)だろう	あいさつ 8
28. [ド]ガン{ジャッタ}カ	どう(B) でした(B)か	自由会話 1
29. [ナッ]チュ{ジャッタ}トイ	なる(B)ん だった(B)のに	自由会話 1
30. ナ[ラン]]モン({)ジャッ({)タカン	できない(B)もの だった(B)から	自由会話 1
31. ヒ[バ]ティオ{トククツチェ	火鉢(B)を 作って(B)	自由会話 1
32. [ヒャク{ゴジッ}キンイリノ	百(B) 五十斤(B)入りの	自由会話 1
33. [[マーツ]ノキ{ナン]]ロー	松の木(B) など(B)は	自由会話 1
34. [[マーラ{マ}トゥモ	まだ(B) 松(B)も	自由会話 1
35. ミチェ{コー]]カト	見て(B) 来よう(B)かと	あいさつ 3
36. [メ]シモ{クワンジー	飯(B)も 食わずに(B)	あいさつ 2
37. [モッ]チ{コイ	持って(B) 来い(B)	あいさつ 5
38. モ[ロイ]]モン{ジャッタ	帰る(B)もの だった(B)	自由会話 2
39. [[モン{ジャッ]タカ	もの(B) だった(B)か	自由会話 1
40. [[ユームン]]({)ジャッタ	結う(B)もの だった(B)	自由会話 1
41. [ヨ]カゴ{タイカ}ラ	いいようで(B) ある(B)から	あいさつ 5
42. [[ローカイ]]({)トオモー]]チェ	どう(B)かい と思って(B)	あいさつ 1
43. [ロ]ガン{ジャッタカー	どう(B) だったか(B)	自由会話 1
44. [[ワーン]]{ダー]]ワ	あなた(B)の 田(B)は	あいさつ 3
45. ワ[ケ]チェ{モロッチェ]]	分けて(B) 帰って(B)	自由会話 2
46. ワ[ル]モン{ジャロ	悪者(B) だろう(B)	自由会話 2
47. ン[マ]ノ{ハ}ミモ	馬(B)の 食み(B)も	あいさつ 2

(参考) B 型+B 型ではじまる長い音韻句

アイ({)モン({)ジャ	ある(B) もの(B) だ(B)	あ 3
[[アイ]モン{ジャ{マー]]	ある(B)もの だ(B) まあ	あ 6
ア[ゴ]タ({)アッ]タ({)ト	ある(B)ことは あった(B) の(A)	自 1
[[アザイ]]ナ{レキ}ガタ{ジャ	たいそうな(B) できかた(B) だ(B)	あ 3

アッ[ト]キ{モッチ}{コイ	ある(B)とき もって(B) 来い(B)	あ 4
イ[チ]バン{ヤス}カー{シナガ	いちばん(B) 安い(B) 品(A)が	自 1
ウッ[タッ]チェ{クイ}{カラ	打ち立って(B) 来る(B) から	あ 1
エ{ミシケン}]]{カラ	よく(B) 見つけない(B) から	あ 4
[オー]]{トレ}]]{ト	多く(B) 取れ(B) 」 と	自 2
オ[ヤ]ジナンロー{ダイー}ノ{トキヤーヨン	父親(B)なんかの 代(B)の とき(B)は	自 2
カ[ライ]]モ{トクク()}ロー{トオモー}}チェ	唐芋(B)を 作ろう(B) と思って(B)	あ 3
[カ]ルチ{キタカラ}{コ}ラ	担いで(B) 来た(B)から これ(A)は	あ 6
[カン]]{テァ}{カラ	食べる(B) のだ(B) から(?)	自 2
キ]タ{コトー}{ヤッパ]リ	きた(B) こと(B)は やはり(B)	自 1
[ク]リョ{トッ[ティ]]{キチェ]]	くれ(桶板)(B)を 取って(B) きて(B)	自 1
ココ[ノ]ツ{イッ}{チェラー}トウ{}}ユーチェ	九つ(B) はいっ(B) ている(A)よ」 と言って(A)	自 2
コ[メ]]{イッショー}}ガ{マー	米(B) 一升(B)が まあ	自 1
シェ[キ]ユ{イッショー}}ワ{()}マー	石油(B) 一升(B)は まあ	自 1
シ[ロ]カ{モン{ナン}}ダ	白い(B) もの(B) なんか(B)	自 1
[[シン]]パイ{ジャラッ}タ{ロー	心配(B) であられた(B) だろう	あ 7
[[シン]]パイ{ジャラッ}タロー]]{パッチェン	心配(B) であられたろう(B) けれど	あ 7
[[ダイ]ソージ{ジェチェ}{イッカラ	大騒ぎ(B)で 出て(B) 行く(A)から	自 2
[[ダイ]ソーロ{ヨラ{セン}ガ	大騒動(B) でありは(B) しない(A) か	自 2
タ[ケツケモ]]{ナカ}ゴ{ヤッタ{モン{()}ジャカラ	焚きつけ(B)も ない(B)よう だった(B) もの(B) だ(B)か	
ら 　あ 6		
タ]ラ{キチェ}{ヨカ{ト}ヤラー]]	ただ(B) 来て(B) いい(B) の(A)だ よ	あ 8
[[タン]コヤ{ヤッタ{()}カラ	桶屋(B) だった(B) から(?)	自 1
[チャ]モ{ノー}}ジェカラ{マ	茶(B)も 飲んで(B)から まあ	あ 6
ツ[ケ]]{チェーテ{クレン}カ	つけ(B) ておいて(B) くれない(A)か	あ 4
[[ドー{ジャッ}{()}チャ]ガ{()}マー	どう(B) だった(B) としても(B) まあ	自 1
トシ[ヨ]レ{ヨッタ{モン{()}ジャカラ	年寄り(B) だった(B) もの(B) だから	あ 7
ド[ヨー]]{モッ}{チッカイ	どれ(B)を もって(B) いく(A)か	あ 4
トリ[カ]エシモ{ナラン{コッ}チャカラー	取り返し(B)も できない(B) こと(B)だから	あ 7
ナ[シー]]{ジャラッ}タ{()}チューチェ	なし(B)に なられた(B) と言って(A)	あ 7
ナ[ナ]ツ{イッ}{チェラーイ]]	「七つ(B) はいっ(B) ている(A)よ	自 2

ハ[イツ]チ{キチェ(())カラ	はいって(B) 来て(B) から	自 2
[[ビン]ボ(())ヤッタ(())カラ	貧乏(B) だった(B) から	自 1
フツ[ト]カ(())タル(())ヤッタ(())カラ	大きな(B) 樽(B) だった(B) から	自 1
フ[ト]カ{ジェン{ダッ(())タ(())カラ	大した(B) 金(B) だった(B) から	自 1
[[モツ]チ{クイ(())カラ	持って(B) くる(B) から	あ 4
[ヤ]スイ{モン{ジャツ}タ↑ロ	やすい(B) もの(B) だったろう	自 1
[ヨ]カ(())モン(())ジャツタ	いい(B) もの(B) だった(B)の	自 2
ロ[ガン]{ジャツ(())タ{モン}{(())ジャツ}タ	どんな(B) だった(B) もの(B) だった(B)	自 1
ワ[ル]モン{ジャ(())カラ	悪者(B) だ(B) から	自 2

## 参考文献

木部暢子(2000)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.

児玉望(2012a)「甌島の二型アクセントー自発談話音声資料の分析」『熊本大学言語学論集 11』47-68.

児玉望(2012b)「屋久島の二型アクセントー自発談話音声資料の分析ー」『音声研究』16-1. 119-133.

平山輝男(1967)「トカラ群島・屋久島・種子島の方言」『国語学』69.82-103.

平山輝男(1969)『薩南諸島の総合的研究』明治書院.

日本放送協会編(1981)『カセットテープ 全国方言資料』第 9 巻 辺地・離島編 III 九州,  
日本放送出版協会. (1959-1972 年にソノシートで刊行, 1999 年 CD-ROM 化)